



Title	はじめに
Author(s)	栗生, 澤猛夫
Citation	西洋史論集, 3, 100-101
Issue Date	2000-03-08
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/37434
Type	bulletin (article)
File Information	3_100-101.pdf



[Instructions for use](#)

東出功先生とその業績

— CD-ROM化にあたって —

はじめに

西洋史学講座 栗生澤 猛 夫

東出功先生が亡くなられてから早くも一年半が過ぎた。御壮健な先生だったので、やや体調を崩されていると聞かされてはいたが、あれほど急にお亡くなりになるとは思いもしなかった。残念でならない。もっとも一番無念だったのはおそらく先生御自身であつたらう。何よりも長年の御研究を一つにまとめることができなかつたことは、先生としても心残りであつたにちがいない。

先生は昭和六年北海道に生まれ、同二十九年三月に北海道大学文学部史学科西洋史学専攻を卒業、引き続き同大学院文学研究科修士課程、そして博士課程に進まれた。昭和三十三年七月に北海道大学文学部の助手（史学科）に採用され、同三十七年四月に函館工業高等専門学校講師に配置換えとなり、同四〇年九月に助教に昇任、同四五年四月に北海道大学文学部助教に配置換えとなり、同五五年四月に教授に昇任、平成七年三月停年をむかえられるまで母校で教鞭をとられた。その後二年において北海学園大学人文学部教授に就任されたが、平成一〇

年六月二一日不帰の客となられたのである。

先生が北海道大学に在職されたのは合わせて二八年九月である。その間主として教養部対象の歴史学、西洋史学関係の講義・演習を担当されたが、それが先生のレゾネートルでもあつた。先生は昭和四七年度からは学部でも、また同五六年度からは大学院でも講義・演習を担当され、多くの学生・院生を育てあげられたが、他方教養部教育に寄せる熱意にはいささかも衰えるところになかつたのである。

先生の研究者としての御専門は中世後期イギリス国制史、とりわけ国家と教会の相互補完的あるいは相互依存的関係の通時的・実証的研究であつた。詳しくは今回私どものいささか勝手なお願いを快くお受けいれくださり、東出先生の研究のもつ意義についてお書きいただきたい東北学院大学教授（東北大学名誉教授）佐藤伊久男先生の解題を御参照いただきたいが、私どもが特に強くうたれるのは、東出先生が御自身で掲げられたテーマを首尾一貫して考察され続け、しかも徹底した原史料主義を貫かれたことである。

先生の史料への沈潜、史料に耳を傾け、史料から学ぼうとする態度は、ある意味では歴史家として当然といえるが、先生の場合はこれが徹底していた。史料をして語らしめる——先生の御研究はこれに尽きるといえ、もちろん言い過ぎであるが、そうした側面を強くもつていたように思われる。先生の御研究のこうした側面は、昭和五九年に発表された「*Kings' clerks*」の下限考——「*King's servants*」考（序）——あるいは昭和六三年に最初の部分が発表された「ロンドン聖マルティヌス大教会と国王行政（上）」のころから顕著になり、その後北海道

大学を退官されるときまで、また北海学園大学に移られてからも続々と史料との格闘を物語る論考が発表され続けた。それは主に文学部紀要に掲載されたが、いずれも数十ページ、なかには百ページを越す大作もある。

今回私どもがCD-ROM化して広く同学の士の御参考に供しようとするのは、とくにこれらの史料研究である。東出先生の他の御論考はいずれ別の形でまとめられることもあろうかと考えているが、これらはその量的膨大さゆえに通常の形ではまとめて世に問うことが困難であり、しかもそのままの形で放置しておくことはその学術上の価値からしていかにも惜しいと考えるからである。私どもがこの企画が東出先生の御意志に反することのないよう、それどころか先生の御無念の思いを少しでも晴らすものであることを願う次第である。

最後になったが、今回の企画に特別の御理解を賜り、御丁寧な解説文をお寄せ頂いた佐藤伊久男先生、またありし日の東出先生についての思い出をお書き頂いた本学名誉教授石川武先生、北海道教育大学札幌校教授吉田弘夫先生に深く感謝したい。CD-ROM化の実務には西洋史学講座の赤司道和、山本文彦両氏があたった。その際、本西洋史学講座の出身でイギリス史が御専門の北海学園大学教授常見信代、札幌学院大学助教授菅原秀二の両氏には多大なお世話になった。記して感謝したい。